

朴承賢著

『老いゆく団地—ある都営住宅の高齢化と建替え』

四六判／定価 2,800 円＋税／森話社，2019 年

河合 洋尚

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授／関西学院大学非常勤講師

本書は、東京 23 区の都営桐ヶ丘団地を舞台とするエスノグラフィーである。2008 年から団地で実施してきたフィールドワークに基づき、特に団地住民の高齢化と建替えによる諸問題に焦点を当てている。本書は、序章と「おわりに」のほか、4 部 8 章から構成されている。まずは序章と各部を要約し、最後に評者の見解を述べたい。

まず序章では、本書の問題意識と研究の視点・方法が述べられている。なぜ団地を研究対象としたのかについての問題関心と研究対象である桐ヶ丘団地の概要を述べた後、本書の内容と関連する先行研究が挙げられる。ここで言及される先行研究の基軸は、空間の人類学と老いの人類学である。そのうえで、「老人の空間」をめぐる人類学的研究に着目している。

著者は、本書を人類学の研究書として位置づけているが、その視野は人類学だけにとどまっていない。序章や各章で、社会学、哲学、民俗学、建築学などの諸研究もとりあげている。なかでもアンリ・ルフェーヴル、ミシェル・フーコー、ミシェル・ド・セルトーらの空間論は、実質的に本書の理論的な骨子を成しているといってもよい。つまり、本書において団地は、一方で資本の力による空間秩序と権力配置の産物としてとらえられるが、他方で老人が日常生活を通してつくりあげる

親密で愛着ある場所としても描かれている。

第 I 部は、そうした視点に基づき、近代資本主義の進む日本で「家庭」と団地がいかに歴史的につくられてきたのかを考察している。著者によると、まず日本では明治時代より施行された戸籍法により血縁のない成員が戸籍から除外され、家族は血縁を基本原理とする「小さな家庭」へと変化していく。そして、その家庭がプライバシーをもって居住する根城として、各室が独立した入り口をもち壁に囲まれた小規模な住宅が誕生する。特に戦後の 1950～60 年代にはこうした近代建築の理念が社会に浸透していき、それにより 2DK を代名詞とする公団団地が次々と建設されていくようになった。そのなかで、低所得者層向けの公営住宅も建設されていくが、実際には家賃の問題から極端な低所得者は少なく中流階級も居住するようになったのだという。

だが、桐ヶ丘団地のような公営住宅では、居住者の一定所得が超えると退去勧告がなされる仕組みになっている。特に子供が働きはじめると世帯収入が基準を超えてしまうので、子供は次々と独立していくことになる。それゆえ高齢者だけが団地に残り、団地の高齢化はますます進んでいくことになる。第 II 部は、桐ヶ丘団地を事例として、こうした団地住民の高齢化の歴史を追っている。

第二次世界大戦終結後、中国・満州からの引揚者や戦災者2000名が東京都北区の応急住宅地・赤羽郷に住んだ。1953年になると桐ヶ丘団地が建設されるようになり、赤羽郷の住民は優先的にそこへ入居するようになった。第Ⅱ部では、古くからの住民を主な対象とする個人人のライフヒストリー、および彼らによる自治会、シニアクラブ、サークルなどの参加を描き出すことで、団地をめぐるアイデンティティやコミュニティ意識がいかに形成されてきたかが論じられている。

続いて第Ⅲ部で述べられているのは、2010年頃より始まった桐ヶ丘団地の建替え、およびそれに伴う高齢者問題についてである。桐ヶ丘団地の住民の言葉によれば、建替えにより団地の在り方が「完全に変わった」のだという。建替えは、団地住民の社会関係を変化させた。もともと住んでいた住民が移出し、見知らぬ住民が移入するなか、団地内で形成されていた親密圏が次第になくなっていったのである。また、孤立した高齢者は1DKへと引っ越していくなかで、慣れ親しんできた場所から離れ、愛着あるモノを捨てねばならなくなった。前述のように、団地は都市計画や行政的な規制のなかで誕生したが、桐ヶ丘団地の住民は入居の初期から世帯ごとに空き地を分け、草花を育てるなど、「生きられた空間」をつくりあげてきた。しかし、こうしたコモングとしての庭が移転により消え、さらに付近の商店街もなくなることで、高齢の住民は場所感覚を喪失していくことになった。これらの事例から著者は、建替えが「没場所性」を促進したと指摘している。

そのうえで最後の第Ⅳ部は、建替えにより顕在化することになった孤独死の問題に焦点を当てている。桐ヶ丘団地の住民が歴史的に培ってきた隣人との親密な関係が薄れ、もはや老いた住民が死んでも誰も気づかないような状況になっている。著者によれば、孤独死とは人間関係のアトム化の終着点である。人間は誰でも最後には死ぬ。看取られて死ぬのも孤独死も死ぬことにはかわりない。では、なぜ「孤独死を避けたい」と住民は考

えるのであろうか。その背後には自己の「生」への尊厳がかかっている、と著者は考える。

全体的にみると、本書を通して貫かれている関心は、団地という空間における個々の高齢者住民の「生」であるように思われる。桐ヶ丘団地は、都市計画により建設された近代建築であり、近代資本主義のライフスタイルに合うよう設計されている。しかし、そこの住民は自ら歩き、隣人と話し、つながることで、自ら居心地のよい場所をつくりあげてきた。まさにミシェル・ド・セルトーが述べるように、権力によりつくられた団地空間の網の目をかいくぐることで、住民が「生きられた空間」をつくりあげてきたといえる。ところが、建替えは、古くから住む住民が培ってきた「生きられた空間」を喪失させ、彼らの「生」の尊厳を奪っていった。その到達点として著者が挙げているのが孤独死であろう。団地の高齢者たちは常にボケないよう自らの「生」を律している。本書には、彼らがいかに団地生活で「生きられた空間」を再生産していくとよいのか、というメッセージが見え隠れしているようにも感じられた。

本書は、韓国出身の人類学者が、団地という題材を通して日本社会が抱える高齢者福祉や孤独死問題を浮き彫りにした、優良なエスノグラフィーである。本書には少なくとも二つの特徴と意義があるだろう。第一に、本書は、2016年に東京大学総合文化研究科で提出した博士学位論文や各種学術誌に掲載した論文をベースとしているが、内容は難解ではなく、団地や団地研究に関心を抱く多くの読者が手に取ることができる本となっている。かといって事例分析に深みがないわけではなく、人類学という学問分野を超えた幅広い議論が展開されている。第二にテーマが新しい。これまで日本の団地をめぐる人類学的研究が全くなかったわけではないが、団地の歴史、機能から個別の事例分析を1冊にまとめた本は他に類がない。桐ヶ丘団地で実施した綿密なフィールドワークに基づき、人と人、人とモノ（建物や所有品）の関係性について、政策を加味しながら丹念に描き出

した点は評価に値する。

私事であるが、評者は都市空間や都市景観の人類学を専門としており、いま公営住宅の多い町で暮らしている。身近にある団地をいかに人類学の視点から研究するかについて、本書から多くのインスピレーションを受けた。確かに日本の団地は高齢化が進んでいるし、近年は諸外国からの居住者が増えて多民族的状況に置かれているところもある。団地は人類学の研究の対象として今後ますます重要性を帯びてくるであろう。

ただし、あくまで人類学という視点に限定すれば、本書には特に二つの点でさらに研究を深めていく余地があると考えられる。

一つ目は、新たに入居してきた人々（以下、新入居者）についての記述がやや欠けている点である。本書は、古くから居住する高齢者に焦点が当てられすぎていて、その他の層については高齢者とは「距離ある存在」として部分的にしか言及されていない。だが、評者の居住地を例にとると、新入居者は古くからいる団地住民と自治会や町内会やサークルなどを通して交流することもある。また、近年は公営団地に中国やネパールなどからの移住者が入居する状況も増えている。本書では年齢構成には重点が置かれているが、民族構成など他の要素にはあまり関心を払っていない。例えば、桐ヶ丘団地に住む高齢者住民に旧満州国からの引揚者が多いならば、中国や韓国から移住した新入居者と個人的な交流を深めることはないのだろうか。それとも桐ヶ丘団地には外国人世帯は1件もないのだろうか。日本の高齢者に焦点を当てる一方で、より多様な背景をもつ新入居者との絡み合いをもう少し丹念に記述してもよかったのではないかと思える。

二つ目は、理論的な位置づけについてである。本書は、空間や老いをめぐる先行研究を脱領域的に挙げているが、その反面、本題であるはずの空間の人類学的研究にかんするレビューがやや乏しい。空間の人類学的研究は、エミール・デュルケームに始まる長い歴史があるし（Lawrence and

Low, 1990）、1990年代からは都市空間の人類学という分野が出現している（Low, ed. 1999; Low and Lawrence, 2003, etc.）。特に後者は、ルフェーヴル、フーコー、ド・セルトーの理論的影響により誕生した領域であり、資本の原理による空間の生産と地域住民の「生きられた空間」とのせめぎ合いを論じている点で、本書の関心とも重なっている。そもそも本書は、団地という概念に明確な定義を与えておらず、日本語のローカル・タームとしてそのまま使用している。だが、団地というローカル・タームを使うことで都市空間の人類学においてどのような理論的な意義があるのかが、本書では示されていない。序論で都市空間の人類学は挙げるべきであったし、欲を言えば、その動向のなかで団地の研究が理論的にどのように位置づけられうるのかについて説明が欲しかったところである。

もちろん、以上の指摘が本書の目的そのものと直接かかわるものではないことは承知している。本書が、団地の人類学的研究において重要なエスノグラフィーであることは疑いの余地はない。人類学やその隣接領域の研究者が日本の団地や都市空間の研究を進めていくにつれ、今後、本書を無視して通ることができなくなるであろう。だからこそ、評者は、団地の人類学的研究をより理論的・方法論的にも深めていく必要があると考え、あえて二つの疑問を提示させていただいた。本書の書評はリプライがあるので、議論の応答を通して、このテーマを少しでも深めていくことができれば幸いである。

参考文献

- Lawrence, Denisel. and Low, Setha. M. (1990) The built environment and spatial form. *Annual Review of Anthropology*, 19, 453-505.
- Low, Setha M. ed. (1999) *Theorizing the City: The New Urban Anthropology Reader*. Rutgers University Press.
- Low, Setha M. and Lawrence, Denisel, eds. (2003) *Anthropology of Space and Place: Locating*

Culture. Blackwell Publishing.

リプライ

『古いゆく団地—ある都営住宅の高齢化と建替え』 —書評に込めて—

ソウル大学人類学科 BK21 プラス事業団 BK 助教授 朴 承賢

この度、拙著『古いゆく団地』を丁寧に読み、適切にコメントをくださった評者河合洋尚氏にお礼を申し上げます。また、書評を掲載して下さる『人間福祉学研究』の編集委員の先生方にも感謝の意を申し上げます。

本書は、東京北区桐ヶ丘団地でのフィールドワークから描いた日本団地の戦後史、団地の誕生と衰退、再生の物語である。日本の高度経済成長期の遺産としての団地、超高齢化時代における大規模な団地のあり様を明らかにする過程は、住まいを媒介として戦後日本社会を読む作業であった。本書は2016年、東京大学総合文化研究科に提出した博士論文「IDKでの孤独と死、そして尊厳：『東京桐ヶ丘都営団地』の高齢化と建替えのエスノグラフィー」をもとにしたものである。そして、「一般財団法人住総研」の2017年度出版助成を得て、広い層の読者に読んでもらいたいという希望を持ちながら編集した本である。

続けて評者の質問に対してリプライしたい。評者のコメントのように、本研究において新入居者の存在は古い住民たちの立場や口述から部分的にしか記述されておらず、新入居者についての記述がやや乏しい。新入居者にもっと関心を払ったら、その多様性にも目を向け、グローバル化の中での団地暮らしをもっと豊かに記述することができただろうと考える。

筆者が高齢住民、特に団地の「古い住民」に対

するインタビュー調査に集中したことには次のような理由があったと思われる。筆者の桐ヶ丘団地調査は、どうして東京の中に住民自らが「高齢者ばかり残っている」と述べる大規模団地が存在するようになったのだろうかという質問を出発点とした。そして、本書における団地暮らしやその歴史は住民たちのライフヒストリー、入居当時の喜びを共有する古い住民たちの口述に頼って、描き出したものである。そのため「団地に刻まれている人生」という題目の節があるほど、筆者は地域に根を下ろした人たちの「団地歴」を聞き取ることに集中した。桐ヶ丘団地建設の当時を照らし出すため、敗戦直後の臨時居住地「赤羽郷」時代からの住民たちに繰り返しインタビューしたりもした。また、建替え以前と以後を比較して記述する際にも、建替えが始まる以前から住んでいた住民たちに建替えがどのように受け止められているのかに注目した。

以上のような調査過程であるから、やむを得ず団地暮らしの記述は古くから住んでいる住民の物語に偏っており、それは本研究の特徴であると同時に限界となったと考える。団地は高齢化と老朽化で老いているけれど、建替えや地域再生の取り組みとともに新しくもなっている。それと同時に評者の指摘のように住民構成の民族的多様性も増大している。団地と移住、多民族的状況に関する研究は、グローバル化によるモビリティを視野に入れて団地の今を物語る作業になると考える。今後の団地研究を続ける際に、それを新しい研究テーマにしたいと思っている。

次に、評者は都市空間の人類学に関するレビューがやや乏しいとコメントしている。都市空間の人類学研究に関するレビューは学位論文から本になる過程で縮約されたことはあるが、都市空間人類学のエスノグラフィーの道標があったからこそ、方向を見失わずフィールドワークを進めることができたと思う。

本書は、空間支配が日常生活、そして日常生活を超える社会的権力の源泉であるとの理論的立場

(Lefebvre, 2000) から、老年の孤独をもたらした空間支配の歴史を遡った。これと同時に、空間を自分のものにする試みとその空間的想像力を議論することで、住居空間の在り方を人間の尊厳の問題として位置付けようとした。本書は団地に刻まれている近代建築のユートピア的夢と窮状の記録である。近代建築がつくり出した私的領域と公的領域の分離、自己責任にゆだねられた私的領域における都市高齢者の日常的な孤独と孤立の問題に着目したのだ。

桐ヶ丘団地がまさにそうであるように、近代の住居が国家政策と資本の制約に縛られており、日常実践がその空間の支配に圧倒されているにもかかわらず、依然として住居は居住者の「持続的な日常生活の場所」として存在する。アンリ・ルフェーブの空間理論、ミシェル・フーコーのヘテロトピア概念、エドワード・レルフの場所の現象学は日本社会における団地という空間の意味を分析し、その生活世界や場所性を考察する際に重要な手引きとなった。桐ヶ丘団地は、古くから住んでいる住民たちの長年の住まいであると同時に、福祉行政や住宅政策が深く関与している空間としての特殊性を有する。筆者は都市空間としての団地を意識しながら、国家政策や建築計画、地域福祉が絡んでいる歴史的産物としての桐ヶ丘団地を記述しようとした。そのため、本研究は都市空間人類学だけではなく、住居人類学、福祉人類学、公共人類学の領域にも目を向けている。

本団地研究は、戦後住宅政策の中で登場する団地の誕生から現在までを、日本社会文化の脈絡か

ら読み取ることを目指した。韓国で生まれ育った筆者において、「団地」は翻訳が要らない「当たり前」(岩本, 2015)のような言葉でもあった。桐ヶ丘団地の街並みは、韓国の古い団地の様子と似ていて、私には最初から馴染みのある風景であった。韓国で「団地」は、〈アパート団地 danzi, 아파트 단지〉と呼ばれる高層集合住宅一般を示す言葉であり、「アパート団地」で住むことは、韓国人において普通な暮らし方でもある。

しかし、桐ヶ丘団地調査が進むにつれて、両国の住宅政策や制度はもちろん、団地の社会文化的意味やその生活世界、団地をめぐる諸実践はかなり異なることが分かった。筆者は、家は社会文化的構造そのものだ(多木, 1976)という認識から、今後団地の韓日比較研究を行いたいと思っている。比較研究において、都市空間としての団地の位置づけを明確にすることは、もっとも重要な作業になると思われる。

リプライを書く時間は、自らの研究を振り返ってみて、今後の作業を色々考える機会になりました。河合洋尚氏に再び感謝の気持ちを申し上げます。

参考文献

- 岩本通弥 (2015) 「“当たり前”と“生活疑問”と“日常”」『日常と文化』1: 1-14.
- Lefebvre, Henri (2000) *La production de l'espace*. 4e éd. Anthropos. (양영란 訳, 2011 『공간의 생산』 에코리브르).
- 多木浩二 (1976) 『生きられた家』田畑書店.